

2012 年度卒業研究

サブカルチャーとしてのゴシックファッション

藤女子大学文学部

文化総合学科 0915061 番

氏 名 高橋 まり

担当教員 野手 修

目次	ページ数
はじめに	1 p
一章 ゴシックファッションに至るまで	2 p
1-1 ストリート・ファッションの隆盛と『KERA!』	2 p
1-2 ポストパンクとゴスの登場	3 p
1-3 ヴィジュアル系ブームと「お茶の間」への進出	5 p
二章 そのファッションの形式とルール	6 p
1-1 「先輩達」から「初心者」に向けて	6 p
1-2 ゴシックファッションの基本	7 p
(1) ゴシック・スタイル	8 p
(2) ロリータ・スタイルとゴシック&ロリータ・スタイル	10 p
(3) パンク・スタイルとゴシック・パンク・スタイル	12 p
三章 聞き取り調査からみえた「ゴシック者」の姿	13 p
3-1 Aさんの場合――	13 p
3-2 Bさんの場合――	15 p
3-3 Cさんの場合――	18 p
考察とまとめ	22 p
参考文献・資料	24 p

## はじめに

いつの時代も、人はファッションを気にしないではいられない。被服は自己の代替物ともいえるほどに、自己の印象を左右する。その他のしぐさや言語以外の多くの外見の手がかりによっても、その人の人間性を判断されがちであり、第一印象を「みすぼらしい」と判断された者は、以降も悪い方の印象で見られるようになってしまう。そのため、信望獲得、社会参加への願望を叶えるためにも、人々は自分をより良く見せる服、周囲に照らし合わせておかしくない、好感を得るスタイルの探求に暇がない。しかし、そういった人々の活動によって、「標準である」とされたスタイルも決して永続的ではなく、いつかファッションの「革新」が起こることにより古くなり、また新しくはやり始めたスタイルに乗り換えざるをえない。

ファッションにはそのような性質があり、事実そうやって連綿と続くモードの歴史が作り上げられてきたわけだが、中には例外もある。英国発のテディボーイ、モッズ、パンクに代表されるサブカルチャー由来のファッション・スタイルである。これらは多様な意味を含んだ象徴的アイテムに始まり、レジャーなどライフスタイルも巻き込んだ、総合的な反社会的スタイルである。もちろん社会に反抗しているわけだから、流行とも縁がないし、信望獲得、社会参加といった同調への願望も希薄だ。

英国でサブカルチャーが生まれたのは、1950年代であるとされている。「第二次世界大戦の終了にともなう社会の安定と未曾有の経済的繁栄を背景として（『豊かな社会』）、かつてない時間的・金銭的余裕を獲得した若者たちが親の世代の価値観を拒み、自分たちの文化の創造を志向し始めた」（遠藤：2000）。それらの担い手は主に労働者階級の若者たちで、彼らの「世代的葛藤」や、資本主義における従属的位置からの「抵抗」のために、エドワードィアン・スーツに身を包んでみたり（テディボーイ）、髪の毛を短く整えてスクーターに乗ってみたり（モッズ）したという。彼らが求める、例えば安全ピン、つま先の尖った靴、オートバイなどは、彼らにとって象徴的アイテムであり、D・ヘブディジは「聖痕の一形式」、「自己に課した追放のしるし」と表現する。また、彼らの、前髪を伸ばしてみる、スクーターやある種の音楽のレコードを揃えてみる、ある種の服を入手する行為は、ささやかな「違反」ではあるものの、これらによってスタイルが形成され、「拒絶」の記号となるのだという。

時代は下り、サブカルチャー的なファッション・スタイルは日本をはじめ世界各地で

生まれ、蠢いている。英国から始まり、日米で違った形でもって発展していったゴシック・スタイルもまたしかりだ。ただし、サブカルチャーという用語が使われはじめたのは、1950年代の英国である。当時の英国といえば、明瞭な階層社会であり、貧富の差も激しい。

階層という意識に乏しく、生活が立ち行かなくなる不安も英国ほどではない日本では、サブカルチャーはどのような現象として興り、人々を惹きつけていくのか。また惹きつけられた人々にはどのような特徴が見られるのか。

この論文では、筆者も愛好していて馴染みがあり、同じ当事者の目線から探っていくことのできるゴシック・スタイルを取り上げて、日本的なサブカルチャーのあり方を見ていく。また、同じくこの趣味を持つ愛好者(以下、高原英理の書籍の記述により「ゴシック者」と表記)に聞き取り調査を行い、サブカルチャー的スタイルの成立の過程と、彼女たちがなぜゴシック・スタイルを選んだのか、その本質を表すべく近づいていくことにする。

そこで、一章では現在の日本のストリートファッションの隆盛からゴシックカルチャーの発生、受容の過程をたどる。二章では、一章で述べた課程によって作り上げられ、現在専門書籍等で定義されるゴシックファッションの形式を考察する。三章では、ゴシック者に行った聞き取り調査とその回答を中心に述べていこうと思う。

## 一章 ゴシック・ファッションに至るまで

### 1-1 ストリート・ファッションの隆盛と『KERA!』

ファッションの「革新」により、作り上げられた既存の標準とは異なった新しい服の標準は、デザイナーによって創造され権威的なコレクションに発表される。しかし発表されたばかりの段階では、革新的なそのスタイルはまだファッションとは言えない。人々が驚きに目を見開きながら「新しい標準」を眺める中、一步先んじて新しいスタイルを導入する者が現れなければいけない。ファッションの創始者や、新しいスタイルのごく最初期の採用者、いわゆる「ファッション・リーダー」として影響力を持つ少数のファッション・エリート集団である。こうした過程によって、人々は新しいスタイルを次々に取り入れることができるようになり、ようやく「新しい標準」はファッションとなりうるのだ。

だが、近年の日本では、欧米のコレクション発祥、トップダウン方式のこうしたハイファッションからの人々への流行といった構造が揺らぎつつある。ストリート・ファッションの隆盛である。

ストリートを闊歩する等身大のファッション愛好者たちが、自身の着たい服を、着たいようにコーディネートして作り上げていく。ブランドの権威も経済の思惑も意に介すこともなく、異性を誘惑する目的（中野は「本来、モードを牽引してきたのは、恋愛のエネルギーだった」（2010）という。）があるというようにも見えない。

ストリート・ファッションの当事者が目指すのは「個性」である。上記のファッション・リーダーも、社会的反抗者も、大衆の行動と全く無縁ではあり得ない。前者は、大衆から一歩先んじる必要があり、後者は大衆に反抗する必要があるからだ。ストリート・ファッションの当事者は、集団の行動とは関係なしに物事を決めることができる、本当に個性的な人間であるといえよう。そうした街中で輝くスタイルが、すれ違う人に影響を与えるだけでなく、ブログや雑誌の「ストリートスナップ」に掲載されることで全国に伝わる、新しい流行を生む、新たなスターを生む、などの現象を起こしている。

ストリート・ファッションを主に取り上げる雑誌の中で、価格も安く、中高生の女子の手に届きやすいものに、インデックス・コミュニケーションズから刊行されている『KERA!』がある。『KERA!』は1998年に創刊されて以来、東京・原宿のストリート・カルチャー、ファッションを取り上げてきた。中でも、音楽シーンとの繋がりが密接な、「ロリータ」、「パンク」、そして「ゴシック」のスタイルが主に取り上げられるようになる。日本に数多あるファッション雑誌の中でも、これらのスタイルやブランドを取り上げようとする雑誌は少なく、登場してもすぐ廃刊に追い込まれるなどして、ほぼ『KERA!』が独占状態である。この『KERA!』がきっかけで、マイナーなジャンルであったこれらのスタイルは全国的になり、それぞれをミックスしたコーディネートが提案される、「KERA系」として一纏めに括られるなどして、広く認知されるようになったといえる。

## 1-2 ポストパンクとゴスの登場

『KERA!』の登場により、若い読者にはまるで『KERA!』以前にはゴシック・スタイルが存在しなかったのではと錯覚しやすくなってしまいが、ゴシック・スタイルは『KERA!』の登場するはるか以前に誕生した。

そもそも「ゴシック(Gothic)」という形容詞は、本来「ゴート族風の」という意味で、古臭い建築の古城や聖堂に対し「野蛮である」といったニュアンスで使用されていた。だが中世ゴシック様式の聖堂は、16世紀の宗教改革の際、「イコノクラスト運動」によって破壊され、戦火もあいまってお化け屋敷同然の廃墟に成り果てる。その後、16世紀後半以降

に金持ちの道楽者達の「グランド・ツアー」によって、廃墟の城の荒涼とした美が評価され、17世紀にはピクチャレスク様式が流行。18世紀、大金持ちの二世議員であったホレス・ウォルポールも大いにそれに心酔し、人工の廃墟「ストロベリー・ヒルズ」を制作するも、それは様々な城や聖堂からパーツをより集めたような、ちぐはぐで悪趣味なものだった。1764年、その城の中で奇怪な夢を見たウォルポールは、その夢の中の出来事を小説にして纏め上げた。それが『オトランド城奇譚』である。以後、連綿と続くゴシック小説の原点とされる。

それから約200年経った1970年代末期～80年代初頭の頃、「ゴシック」という単語が新たな使い方をされることになる。英国のパンクロックの勢いがひと段落した後に、ポストパンクのブームがやってきた。ある種のポストパンク・ミュージックの陰鬱なムードを指すために「ゴシック」、またはGothicの短縮形の「ゴス(Goth)」という単語が使われることになったのだ。後にその形容詞はバンドを攻撃する意味を持つが、1982年にソーホーのクラブ「バットケイヴ」が誕生すると、それらのバンドと世界観を愛好する者たちのアイデンティティを表すスローガンになったとレイノルズ(2010)は述べる。その音楽的特徴は「一般に、刃が唸るようなギターが全編に配され、ハイピッチのポスト・ジョイ・デヴィジョンと言うべきベースラインがメロディを司る。ビートは鎮魂歌のように催眠的、あるいはタムを利かせたヘヴィでブルンジとアパッチの出会いといった“部族”風。ヴォーカルはオペラ風に悲痛な叫びを上げるか、(中略)低い歌声で重苦しく呟くのが典型的だった。」(レイノルズ、2010:283p)

「バットケイヴ」は、ニュー・ロマンティックやブラックミュージックを拒否し、「レザーとレース飾りに身を包み、30年代のモンスター映画のモチーフを好む者たち」が「電球に群がる虫みたいに」集まったとジョニー・メルトンと言う。やがてスージー&ザ・バンシーズ、バウハウス、バースデイ・パーティーをはじめとするバンドが脚光を浴びることになる。

墮落や性的倒錯を想起させる事物を愛するゴスは、美しく自己を飾り立てるファッションも特徴的で、フェティッシュ性が強かった。そのためか、ミック・マーサーは「現在に至るまで、ゴスには他のどのサブカルチャーよりも女性が多い」と証言している。前述のスージー&ザ・バンシーズの女性ボーカル、スージー・スーは独特のファッションとメイク、ライブでの女王然とした振る舞いから、ファッション・リーダーとしても見られていた。だが、パンクの衰退により発生し、反ロックを掲げて活動してきた彼らであったが、

徐々にロック的、しかも女性ファンが多いにもかかわらず、最も男性的ジャンルであるヘヴィ・メタルへと路線変更をしていく。

### 1-3 ヴィジュアル系ブームと「お茶の間」への進出

音楽の変遷はさておき、ポストパンクにより生じてきた音楽とファッションを伴った暗い心象の表現の流れは日本にも上陸し、やがてハードなヴィジュアル系バンドブームに形を変えながらストリートの隅で生き続けた。1997年には、MALICE MIZER がメジャーデビュー。オリコン上位にも進出し、本人たちの徹底された西洋貴族的スタイル、世界観はもとより、彼らのスタイルやメイクを真似た熱狂的なファンの姿も広く注目を浴びることになる。ヴィジュアル系バンドに特化した音楽雑誌ではもちろん、前述の『KERA!』創刊により、(世間的にはマイナーではあるが)都心部以外の地方にも存在を知る機会ができたというわけだ。2001年には、ゴシックとロリータ、さらにそれらのミックススタイルやその周辺に特化した『KERA!』の別冊、『Gothic&Lolita Bible』が創刊となる。漫画家の三原ミツカズによる美しい表紙イラストが書店のファッション雑誌売り場で目立ったせいも、一部の漫画の愛好者もこれに注目することになる。この頃あたりから、「特異な若者のカルチャー」「変わり者の若者の実態」として、テレビの情報番組のミニコーナーなどでも取り上げられるようになる。だが、大部分はファッションの特異性、常識ではあり得ないとされる服を平然と着用する当事者の異常性、を出演者が奇異の目で見る趣向のものがほとんどで、偏見を助長しがちな取り上げ方が一般的だった。

2003年には、大阪府で「河内長野市家族殺傷事件」が発生。2007年には、京都府で「京田辺警察官殺害事件」が発生。双方とも、加害者側の少年少女が「ゴスロリ」を愛好していたとしてセンセーショナルに報道され、犯罪者予備軍といったネガティブなイメージが広まることになった。(当時のマスコミと「ゴスロリ」サイドの知識人の攻防については、樋口ヒロユキ『死想の血統 ゴシック・ロリータの系譜学』(2007)に詳しい記述が見られる。)

2004年には、ゴシック世界とも馴染みが深く、『Gothic&Lolita Bible』誌上にもしばしば登場する小説家、嶽本野ばらの『下妻物語』が映画化。ファンタジックな映像美と、ヒロイン・竜ヶ崎桃子を演じる深田恭子が可憐な装いをするということで評判を呼び、数々の賞も受賞するが、やはり一部のマスメディアが「ゴスロリ」という間違った呼称で呼ぶなどした。(桃子が着用するのは「ロリータファッション」であり、ゴシック要素はない)

また、ゴシック・スタイルをはじめとする「KERA系」ファッションは、その見た目の奇抜さから、コスプレと同一視されがちである。ゴシックな洋服を作る正規ブランド品の製品は、少数派に向けたジャンルであることと品質の高さから一着数万円の値段がつけられるが、それらの洋服のデザインをコピーした安価な粗悪品も多く出回っている。その粗悪品は、多くの場合パーティーなどでの一度きりの着用や、性的な気分を盛り上げる際の「コスプレ」のために購入され、使用される。だが、ファッションとコスプレは断じて違う。小野原（2011）の定義によると、コスプレとは、「何者かになりきるためにその衣装を着る遊戯。仕事着や女子学生の制服などが代表だが、現在では人気アニメやマンガの登場人物になりきってその衣装を着ることを楽しむ」行為である。対して「KERA系」をはじめとする「ファッション」はどうだろうか。ファッションは、自身の趣味嗜好やデザイナーの創作の末に作り上げられた服の組み合わせであり、「なりきる」ことを目指す特定の対象は存在しない。おまけにコスプレの場合は、非日常性を楽しむものであって、ひとたび衣装を脱いでしまえば遊戯はおしまいで、「ほんとうの自分」に戻る。ファッションは、着ている時に「ほんとうの自分」になるものだ、と小野原は語る。こういった「コスプレ」と「ファッション」の定義の違いは明確であるが、ファッションの研究者の中にも、これらをきちんと認識していない者が多い。例えば渡辺（2011）は「エンジェラー、サイバー、ゴス、ゴスロリ、パンク」等の奇抜なスタイルを「コスプレファッション」と称し、あまつさえ「海外のコスプレファンの登場をもたらした」などという事実無根の記述をしている。

このように、ゴシック、またはそれに付随する周辺のスタイルは、登場して間もないサブカルチャーが通る道であるかのように、マスコミから冷ややかに扱われる、その実態を誤解されたまま情報が一人歩きしてしまうなど、未だ正しい理解を得られずに「お茶の間」に認識されがちな状態である。

## 二章 そのファッションの形式とルール

### 1-1 「先輩達」から「初心者」に向けて

「どんなサブカルチャーでも、定着するものは必ず、画一性の中に多様性を認める幅を有している。個性を発揮できる自由があり、なおかつ同族だとすぐに認識できる統一性が守られている。」（レイノルズ、2010）と言われるように、ゴシックのファッションには通



常のファッションには見られない、ある意味制服じみたルールがある。

そのルールを、ゴシック者の「先輩」が、ゴシック者になりたてでこれからゴシックファッションで暮らしていこうとする「初心者」にむけて伝えていこうとする試みがある。例えば『Gothic&Lolita Bible vol.32』には「読者モデルに学ぶ ゴシック&ロリータおしゃれレッスン」「ゴスロリファッション用語辞典」。同じく『Gothic&Lolita Bible vol.43』には、「ゴシック&ロリータの先輩達が、皆様の質問に答える… 何でもQ&A企画 ゴシック&ロリータちゃんと賢者の石」というページがある。それぞれ、着こなしのコツや、アイテムやデザインの名称や洋服のマテリアルについての知識から、「紅茶&ケーキのエlegantな頂き方」(『Gothic&Lolita Bible vol.43』 p 76-77)などの身のこなし。さらには、ゴシックを知ったばかりでブランドの高価な服を所有していない、経済的にも恵まれていないであろう若い年代の「初心者」に向けて、何のアイテムを初めに買うべきかを指南するといった趣旨の内容がつかねられている。また、「初心者」が数点のアイテムを入手したからといって、それぞれのデザインがトータルとしてちぐはぐした、アンバランスなコーディネートで外出してはいけない。そのような姿の者が、上記の読者モデルのように完璧な「先輩達」と路上ですれ違った際、ひょっとしたら冷たい視線を投げかけられるかもしれない。

このように、ゴシック者なりたての「初心者」が「この世界に入っていく」のはなかなか困難であり、ハードルが高い。雑誌に掲載されるアイテムは一点で2万円を超える場合もあり、入手できるブランドやショップも、ニッチなジャンルであるがゆえにそう多くないし、地方にショップを展開できるのは大手のブランドのみだ。その商品はワンサイズ展開がほとんどなので、体型によっては欲しかったアイテムを諦めざるをえない場合も出てくる。それでもゴシック者たちは自身の嗜好によって、そんなスタイルを諦められない。どんどん嵌っていき、徐々にこなれていく。するとセンスが磨かれていき、「画一性」の中から「個性を発揮」できるまでになっていくのだ。

## 1-2 ゴシックファッションの基本

一章で述べたように、ゴシックファッションは『KERA!』『Gothic&Lolita Bible』によって「ロリータ」「パンク」と一緒に紹介され、やがて「ゴスロリ」「ゴスパン」という新たなコーディネートを生むことになる。以下、「ロリータ」や「パンク」についての記述も交えながら、ゴシックファッションの特徴について述べていく。

## (1) ゴシック・スタイル

現在ゴシック者、ないし「ゴシック」の存在を知る『KERA!』読者やその周辺のファッションや音楽の愛好者が「ゴシック」と聞いて連想するコーディネートを描くと、以下のようなになる。

### 1) 全身は黒一色、もしくはインナーや小物などに白を使ったモノトーン

洋服がほぼモノトーンである分、ゴシック者は生地やレースの素材を意識して統一感を持たせる、また、あえて異素材を組み合わせて遊び心を見せるなどする。そのため、『Gothic&Lolita Bible』誌上では、しばしば生地やレースなどマテリアルに関する知識を教授するページが見られるし、読者もそれを積極的に読んで意識する。これは通常のファッション誌にはあまり見られない現象ではないか。

色に関してはボルドーやエメラルドグリーン、青や紺など濃色を取り入れる場合もあるが、合わせ方やバランスの取り方はなかなか困難であり、「上級者」向けである。

### 2) 「頭物」と呼ばれるヘッドアクセサリー

ヘッドアクセサリーの内容は、シルクハットやポーラーハットなどのクラシカルな帽子類、またはそれを小型化し、リボンやピンで固定する小帽子、帯型やリボン型のヘッドドレス(こちらは主にフェミニンなコーディネートに使用)、ボンネット、薔薇などの造花に羽根などをあしらったコサージュなどがある。また、19世紀の貴婦人の喪服を思わせる、チュールやメッシュ生地を使ったベールなども共にあしらうこともある。

ヘッドアクセサリーの存在は、全体のバランスをとるためにも、浮世離れたイメージを際立たせるためにも効果的だ。

### 3) アクセサリーに使われるモチーフとしての、十字架、髑髏や骨、薔薇、蛇・蜘蛛・蝙蝠

これらは、ゴシック小説に登場するような、中世ゴシック様式の廃墟の城や、夜の墓場のイメージを想起させるゴシックの代表的モチーフである。

十字架や髑髏は墓地を想起し、薔薇は生命の儚さの象徴と死者への手向けの花として愛でられる。蛇・蜘蛛・蝙蝠は、形の気味悪さもさることながら、墓地や廃墟を跋扈する存在であり、魔女の相棒でもある。これらは、貴族のような、幽霊のような、魔女のようなコーディネートにはとてもよく似合う。

### 4) 着用するボトム

スカートなら膝丈からロング丈、前後左右で長さが違うなどのアシンメトリーデザインスカート。ズボンならハーフパンツやフルレングスのワイドパンツなどを合わせて貴公子のようなイメージに。

スカートの形については、ドラマチックに広がるフレア型もあれば、ウエストからヒップにかけて、体に密着したようなマーメイド型もある。マーメイド型は、19世紀末、1870～1890年あたりにかけてのイメージで、マーメイド型に限らず、当時流行したように、ヒップを膨らませボリュームを持たせるバツル型スカート、またはそのスカートに対応したデザインのパニエ（スカートを膨らませるアンダーウェア）もよく見られる。

アシンメトリースカートに関しては、スクエアスカートをアレンジしたものや、ランダムなカッティングやドレーピングなどにより意図的にシルエットを改変したものがある。これは19世紀のイメージからは程遠く、むしろ80年代のヨウジヤマモトやコムデギャルソンを想起させるが、墓場から蘇り這いずり回るゴースト的で、ゴシック者は惹きつけられてしまう。

また、ゴシック・スタイルは異性装に寛容であり、ゴシック者は男女問わずしばしば性別を越境する。ハーフパンツは小公子のような可憐な王子様風に。ワイドパンツは大人っぽい伯爵のようなイメージである。

#### 5) 西洋貴族のエレガントなイメージ

S M的フェティッシュ的に解釈したゴシックスタイルは、むしろ欧米で現在よく見られるタイプである。日本でも愛好者は多く、こういった商品を取り扱うショップもあるが、『Gothic&Lolita Bible』誌上では、あくまで「派生スタイル」という扱いである（同誌43号56p参照）。露出を控えるということは、夏場の日焼けを防止する作用もあるため、ゴシック者は夏でも長袖を着用する者が多く、半袖やノースリーブを着用する場合も、ロンググローブやアームカバーを使用し、涼しくも露出は控えた小物使いをする。ブラウスも、愛らしい印象のフラットカラーを着用する場合もあるが、禁欲的なスタンドカラーが多く好まれる。胸元の開いたトップスには、大振りなネックコルセットを着用し、出す所と隠す所のバランスをよくするコーディネートもある。

#### 6) フラットな厚底靴や、太いヒールのプラットフォームパンプス

靴に関しての好みはそれぞれだが、洋服が特徴的で大胆なので、やはり大胆なデザインの物を組み合わせるのが良い。つま先が丸く、ボリュームのある「おでこ靴」や、10cmほどの太いヒールのプラットフォームパンプスはよく好まれる。ヒールのないぺたんとし

たストラップシューズは可憐な幼いコーディネートに、つま先の尖ったピンヒールのは、SM的フェティッシュスタイルに合わせる、などの使い分けがされる。また、ヴィヴィアン・ウエストウッドによる「ロックンホース」のようなクラシカルな木底靴もファンが多い。

## 7) メイク

ゴシック・スタイルは、例えば亡霊や、魔女や、ゴシック小説に登場する陰気な人々のイメージを表現するものなので、美しく、血色が悪いほどに白い肌が好まれる。目の周りには黒を中心に濃色のボルドーや青、紫、ブラウンなどのカラーをぐるりと乗せる。西洋人らしいくっきりとした目元にするだけでなく、何かにとりつかれたような、もしや既に死んでいるのではないかと不安をもよおすような印象を与えるのである。唇は、血色を悪く見せるためにコンシーラーで色を隠すか、上記の濃色で囲むなどをする。時には、唇の端に血を滲ませるような演出さえ行う。また女性が男性的アイテムを身に着けてトランスセクシャルな装いをする際は、過剰なくらいのノーズシャドウ、頬には輪郭をシャープに見せるシェーディングを施すよう『Gothic&Lolita Bible』誌上ではアドバイスされる。

洋服が大胆で存在感があるため、メイクを怠ることは、全身のバランスを悪くすることである。もちろんこういった統一感のためにも大胆なメイクは必要なのだが、時に素顔を隠しそうになるほどのメイクは他者を圧倒する。これは、前述のサブカルチャーにおける「拒絶」を表現する記号となりうる「ささやかな違反」にあたるのではないか。

## (2) ロリータ・スタイルとゴシック&ロリータ・スタイル

ロリータ・スタイルも、西洋のイメージを持つも日本で育まれたサブカルチャー的ファッション・スタイルで、現在ゴシック・スタイルと共に『KERA!』誌上で紹介されているものの一つである。遠い昔の山の手のお嬢様、もしくは近世から近代にかけての貴族の女性の絢爛豪華なドレスをイメージした、フリル、リボン、レースをふんだんに使った少女趣味なスタイルだ。ただし、厳密な服飾史の資料をもとにしてデザインされているわけではなく、あくまで当事者である非西洋国・日本の少女たちが抱く、「昔々のお嬢様・お姫様ってこんな感じ」というイメージから出発している。使用する色は、しばしば黒やボルドーなど、ゴシック・スタイルでも見られる濃色も使うが、その多くはピンク、サックスブルー、ミントグリーンなど、淡くて可憐な色合いで、花柄や可愛らしい動物、お菓子などの柄やモチーフを扱う。スカートは、お椀型に膨らむパニエでもって膨らませ、メリー・

ポピンズの傘のように飛んでいきそうな印象だ。

そのようなロリータ・スタイルだから、ゴシックとは本来正反対のスタイルであるし、事実、当事者同士でも馬が合わなかったり、互いを一歩引いた目で見てしまうこともある。しかし、それらの特徴をミックスした、「ゴシック・ロリータ」なるスタイルが作り上げられてしまった。『KERA!』『Gothic&Lolita Bible』で編集長を務めた鈴木(2008)は以下のように語る。

「原宿でのスナップは、98年の1月からずっと(今でも)頻繁に行っていますが、98年5月くらいからボンネットをつけた、ドールのような服を着た少女達に会うようになりました。(中略)彼女達のファッションは“ゴシック&ロリータ”、略して“ゴスロリ”と呼ばれているらしいのです。

(98年9月に発売された、ケラ!4号の読者のお便りページに、「ゴスロリ」という言葉が初登場しています。おそらくこれが、ゴスロリという言葉のマスコミデビューだと思われる。)

そして彼女達の“ファッションリーダー”は、MALICE MIZERのManaさんらしく、Manaさん自身が自分を“エレガントで、ゴシックで、ロリータな”スタイルと表現していたことから、ファンの中で“ゴシック&ロリータ”、略して“ゴスロリ”という言葉が生まれてきたらしいのです。」(『Gothic&Lolita Bible Boudoir』、p94)

現在は活動を休止しているMALICE MIZERとしてのManaは、男性でありながら美しく化粧をして女装する、いわゆる「女形」に相当するメンバーであり、その美貌とファッションに憧れたファン達によって、この相反するスタイルがミックスされて出来上がったという。

そのManaがデザイナーとして展開し、「Elegant Gothic Lolita」をテーマの一部に据えたブランド「Moi-même-Moitié」では、彼自身がモデルとして広告に登場する。そのアイテムの数々は、ロリータファッションのブランドから出ているものよりもシンプルなデザインで、リボンやレース、フリルの使い方も、大人しい印象だ。色合いは、モノトーンを中心に上記の濃色を使用。モチーフも、ゴシック・スタイルに特徴的なダークなものを取り入れ、メイクも、濃いアイシャドーにくっきりしたアイラインと、ゴシック的である。そうして誌面にたたずむ美しいManaの姿は、まるで生命のない人形のように、触れればコツンと音を立てそうである。

このように、ロリータ的な愛らしい形を取り入れながらも、方向性は極めてゴシックに

存在するのが、ゴシック&ロリータ、略してゴスロリである。ただし、『Gothic&Lolita Bible』が創刊されて以降、「ゴスロリ」という言葉は、相反するスタイルでありながら、現代のカジュアルな服装から見てアナクロであるという共通項からか、この二つのスタイル、またはそれぞれの愛好者たちを一緒に取り上げる「ゴシック or ロリータ」という意味でも使われるようになった。

### (3) パンク・スタイルとゴシック・パンク・スタイル

パンク・スタイルは、70年代のパンクブーム、そして「Sex Pistols」をプロデュースしたマルコム・マクラーレンとヴィヴィアン・ウエストウッド、そして、また名もないパンクスたちによって作り上げられた。ゆえに、ポストパンク時代に生まれたゴスなバンドのメンバーたちも、どちらかというパンク・スタイルに近い格好である。

その定番アイテムは、貧乏ゆえに破れて開いた穴を安全ピンで留めたポロポロのズボンや、黒のライダースジャケットなど。ヴィヴィアン・ウエストウッドがデザインした、拘束的意匠のガーゼシャツや、巻きスカートを重ねたようなデザインのボンテージパンツ(両足がベルトで繋がっている)。さらには、かつてテディボーイたちにも愛用されたジョージコックス社の厚底シューズも、マルコム・マクラーレンとヴィヴィアン・ウエストウッドによるショップ「Let It Rock」で紹介されたことで人気になった。

特徴を挙げると、わざと穴や切れ目を入れてポロポロ・継ぎはぎにする、スプレーやペンキで汚す(これは労働によって汚れたものを放置したのが始まりか)、ビニール素材で服を作ってみる、などなど。多くの場合栄養が偏り、痩せた体に青白い顔の彼らは、清潔・秩序を守ることこそを良しとする世間によって洗い流された「汚れ」の象徴のようで、見る者を緊張させる。彼らのメイクやトサカのように立てた髪型、汚い言葉遣い、その他の攻撃的アクセサリなどによっても、人心は逆なでられる。まさしくパンクは「違反」のかたまりだ。また、ヴィヴィアン・ウエストウッドの作品にも見られるように、SM風の拘束的意匠も多く見られる。「Sex Pistols」二代目ベーシスト、シド・ヴィシャスのトレードマーク「シドチェーン」は、首に巻きつけた鎖を「R」の刻印がされた南京錠で留めたものであり、同じくパンクな彼の恋人ナンシー・スパングンにより着けられたというエピソード(違うという説も)がある。彼女の所有欲を思わせるようで、エロティックな印象を与える。無秩序と混沌を愛するパンクスたちが、場末の変態アンダーグラウンド文化だったSMを取り入れて、自分たちのものにしてしまったのだ。

そんなパンクの特徴は、アッサンブラージュ（組み立て、流転など）という言葉に表される。外部の物事を変形することに意義があり、それによって生じた諸々の細かい結果は見れば見るほど意味不明だ。

そのようなパンク・スタイルとゴシック・スタイルの融合であるゴシック・パンク・スタイル（略して「ゴspan」）は、より音楽シーンとの関わりが密接である。ハードロック的音楽形態が多かったヴィジュアル系バンド群の中から、パンクの音楽性やファッションに影響を受けた者たちが現れはじめ、それに憧れるファンたちが志向するファッションも、ゴシックでありながらパンク、といった形になっていく。

その特徴を挙げると、使用される生地は、高級感のあるスーツ的なポリエステルと綿の混紡、よりもむしろ綿 100%のツイルやカツラギ、ブラックデニムのような荒っぽくややカジュアルなもの。ゴシック・スタイルに比べて断然カットソー生地や、カジュアルに近い形のアイテムの使用頻度が多く、激しいライブでも活動的。袖や肩、ズボンの身頃を一旦カットし、ナスカンやDカン、ハトメと紐で編み上げて、皮膚が見えるように繫げる（SM的解釈か）、また、生地の端を切りっぱなしにしてわざとほつれさせる、白や赤、紫など、ゴシック的カラーの柄プリントや、ペンキによる汚し加工などを施し、ポップな印象も強い。

これらゴシック・パンクは、『KERA!』の読者である個性的なファッションを愛好する層、それからヴィジュアル系バンドの愛好者を中心に好まれて久しい。

### 三章 聞き取り調査からみえた「ゴシック者」の姿

8月から10月にかけて、実際に札幌市周辺に住むゴシック者4人に聞き取り調査を行った。以下に、4名のプロフィールを簡略に示しておく。

- ・ A（21歳、駆け出しの実業家）
- ・ B（21歳、温泉旅館の仲居）
- ・ C（22歳、フリーター）

#### 3-1 Aさんの場合――

待ち合わせ場所に現れたAさんは、ボルドーの光沢のある素材のワンピースに、黒いレースのロンググローブ、髪型は黒髪の「姫カット」にコサージュ付きのカチューシャをつ

けて、バイオリンケースを模したバッグを携えた姿だった。パープル系のアイシャドーにつけまつげを付けた目元が涼しい。まるで、宮廷のパーティーの場で、貴族のスカンダルを冷ややかな目で見るといった印象を受けた。

Aさんの幼少期に好きだった童話は、アンデルセンの『人魚姫』と『赤い靴』。どちらも、主人公の少女が報われなかったり、自身のわがままによって呪いを受けたり、ハッピーエンドとは正反対の後ろ暗いお話だ。また、童話のほかに印象に残っている作品として、NHKで放送された影絵劇「パンをふんだ娘」をあげてくれた。この作品も、主人公の性格の悪い娘が地獄に落ちて恐ろしい目に遭うという作品だ。地獄には魔女と蜘蛛がいて、その蜘蛛の巣がたいそう印象的だったようだ。蜘蛛の巣はゴシック・スタイルでもよく取り上げられるモチーフである。当時から、薄ら寒いもの、暗いものへの抵抗がなく、ゴシック的原体験だったのではないかと語ってくれた。

幼稚園に通う年齢の頃のAさんは、可愛らしいお洋服が大好きな女の子だったそう。しかし、小学校に上がる頃になると、今まで過ごしてきた幼稚園と、小学校との世界の違いを思い知ってしまい、大変ショックを受けたのだという。というのも、小学校には、月に一度、校長先生のお話を聞く「全校集会」がある。幼いAさんは、「これは重要な行事。だから、着ていくお洋服にも気をつけて行こう」と考えて、小学校入学式に着たような、ピアノの発表会にも着ていけるような、カッチリとしたようなコーディネートで臨んだ。そういう格好が当時の彼女は好きだったのだ。しかし、周りの子供たちは、普段と変わらない格好。それどころか、不思議そうな顔でこちらを笑って見てくる――。

「小学校では、可愛い服は着ちゃダメなんだ」。Aさんはこのことですっかりショックを受けてしまい、以後、可愛らしい洋服を着ることはなくなってしまう。しかし可愛らしい洋服に対する思いは完全に消えたわけではなく、着たいお洋服を自由帳にイラストにして描いて楽しむことにした。それでも、この可愛らしいお洋服は現実には着られない。このことが辛くて、やがて彼女は服への興味を失ってしまった。そんな、小学1年生から5、6年生の頃を、彼女は「服飾暗黒時代」と表現した。

小学5年生頃のことである。当時、Aさんは詩を書くのが好きだった。ホームページを作って作品を公開しようとした彼女は、いくつかの「素材サイト」を巡るようになり、あるサイトに出会うことになる。そのサイトは、ゴシックで好まれるモチーフを扱った素材サイトであり、管理人の女性も、ゴシック&ロリータファッションとスーパードルフィー（ゴシック者に人気が高い、ポークス社より発売のドール）を愛好し、それらの写真をサ



イトに掲載するゴシック者であった。そのサイト内の雰囲気、そして管理人の写真によって、未だ「服飾暗黒時代」を引きずっていた彼女は初めてゴシックファッションの存在を知ることになった。

「気に入った服を着ていてもいいんだ」。こうして、彼女は再び服に興味を持った。とはいえ、当時地方に住んでいたAさんの周りには、あまりお洒落な服を買える店がなく、周辺の同級生なども、服にはあまり頓着しないタイプばかり。中学校に上がって、例えばスカートを短くするなどの拘束違反を繰り返し、私服もその年代では大人びているようなタイプの同級生に出会っても、どこで服を買っているのだろうと疑問に思っていたくらいである。未だ自分で着ることのできないゴシック&ロリータへの思いは、インターネットでの情報収集、それから、カバンなどの持ち物にレースや造花をつけてリメイクすることで慰める日々。ところがある日、近所の書店で『Gothic&Lolita Bible』を発見。それは2005年8月に発売された秋号で、画面は落ち着いた色合いが多く、普通のファッション雑誌（例えば『non・no』『Popteen』など）に特有の「きらびやかさ」に抵抗を持っていた彼女は、素直にそれを見つめて、楽しむことができた。

その後、高校進学を期に札幌に引っ越してから、ショップに通う、同じ趣味を持つ友人知人ができるなどして、Aさんはよりゴシック&ロリータに嵌っていく。所有する洋服もほとんどがゴシック&ロリータのブランドのもの。インタビュー当時は、札幌市大通地区にセレクトショップを開店すべく奔走していた。しかし、彼女の半生も決して順風満帆ではなかった。彼女には常に、一定の「ドロップアウト感」が付きまとう。小学校3～4年生の頃のことである。友人にハサミを向けられたことがきっかけで人と接することが怖くなり、以後、半不登校状態となってしまった。中学校でも人間関係をうまく築くことができずに苦悩の日々が続く。高校も、クラスがなく人との接触も最低限で済む通信制の高校を選んだ。その後、アルバイトに応募するも不採用が相次ぎ、一度も外で働いた経験が得られないまま時が流れた。今回起業するのも、自立して収入を得るためという面が強いという。「私は駄目な引きこもりのニート」と自称し、まつげが顔に影をつける。彼女の告白により、その見事なコーディネートが一瞬だけ、落伍者に仕着せられた囚人服のように見えた。

### 3-2 Bさんの場合――

Bさんは某温泉地で仲居として働いている。普段は勤め先の寮で暮らし、たまの変則的

な半日ずつの休み（午前みの勤務のち翌日の午後からまた勤務）を貰うときは、高速バスで札幌まで出てきて、札幌在住の友人と遊んだり買い物をして過ごすのだそう。インタビュー当時も、バスで過ごしやすいようなややカジュアルな格好。まだ夏だったのに、アウターは黒の長袖パーカーに、首にはストールを巻いていた。暑くないのですかと聞いたところ、「日焼けをしたくないのと、暑さをあまり感じないので」という返事が帰ってきた。日焼けは大敵なのである。その後、カフェで嬉しそうにコーヒーに砂糖をたくさん入れる甘党の彼女にインタビューをした。

十勝、帯広管内で生まれ育った幼少期のBさんは、ちょっと変わった女の子であった。女の子の友達は一人数しかおらず、ほとんど男の子とばかり遊んでいた。男の子っぽい遊びや振る舞いが好きで、もちろん「カクレンジャー」も大好き。お洒落には興味はなく、髪型もベリーショートで、男の子に間違われそうな女の子だった。

ところが小学校に入学した際のことである。子供にとっては急激に世界が広がり、成長を求められる時期である。だが、まわりのクラスメイトはどんどん社会的になるも、Bさんはそれに「乗り遅れた、心が幼稚園のままだった」と表現した。そのためか、彼女は友人たちとワイワイガヤガヤ過ごすよりも、マイペースに自分の好きなこと、趣味を愛好する少女になっていったようだ。小学生のBさんが当時好きだったのは、祖母に習った手芸と、それから、少女漫画雑誌『ちゃお』に影響されたイラスト。細かい作業が好きで、コミュニケーションは不得手。それから、小学生の時にもう一つ好きだったものは、怖い本。よく図書館に通いつめては、『学校の怪談』や、『リング』などのジャパニーズホラーをよく借りていた。なぜ少女のBさんは怖い本が好きだったのか聞いてみた。例えば『リング』の場合。物語が終わっても、後に残る謎や、一抹の気持ち悪さ。それから、ストーリーの色々なところに伏線があり、それらが登場人物の心情と絡んで描写される。そこが好きだったのだという。また、『ダレン・シャン』や『ハリー・ポッター』など、現実とリンクしている（作者と主人公の名前が同じで、彼の体験談と思わせる、実在の駅に魔法世界の入り口がある、など）ファンタジーも好んだ。

中学生になった時のこと、十勝の中学校では普段の学校生活はジャージで過ごし、制服は入学式とテストの日、それから、Bさんが所属していた吹奏楽部の大会で着るのみであったという。普段着る私服に関しても、まだお洒落には興味がなかったBさんは自身で選ぶことはせず、親が買ってきてくれるものを着用。それでも、買ってきてくれた洋服は、彼女の友人からしてみてもお洒落なもので、不満を抱くことはなかった。また小学生の頃

から、親が厳しくて、テレビもあまり見せてもらえなかったため、彼女はクラスでの話題についていけなかつた。ところが、中学1年生のある日、近所の書店で『Seventeen』を立ち読みする。彼女には初めてのファッション雑誌で、彼女にはたいそう衝撃的だったようだ。これで、同年代の少女が手に入れるような情報網を入手した。彼女はこの頃から急激に容姿やファッションに興味を持つようになったが、彼女がより興味を抱いたのは、洋服よりも、メイクだった。中学生ということでお小遣いは少なかったが、100円ショップの製品なども利用しながら化粧品、道具を買い集め、いつしかコレクションは4段くらいの引き出し型のラックにぎっしりするぐらいに。勉強や生活習慣に厳しかった母親であったが、メイクに関しては何も言わず、ただ「良い化粧品を使いなさいよ」と一言。

この頃は、ゴシックやロリータなど、個性的な、いわゆる「KERA系」の存在は知らず、初めてこれらの存在を知ったのは、中学2、3年生の頃に『Gothic&Lolita Bible』を立ち読みしたことがきっかけだった。その誌面は「ファンタジー的で、そこが素敵に思えて惹かれたもの、の自分で着ようとは思わず、ただ見ることのみ“好き”だった」と言う。その後、Bさんが高校に進学した時のことである。そこでできた友人が、ヴィジュアル系バンドのファンで、彼女もナイトメア、the GazettE、DIR EN GREYなどを好きになる。

Bさんには面食いなところがあって、小学生から中学生の頃にはKAT-TUNなどのジャニーズ系グループを好んでいた。ヴィジュアル系バンドがすきになったのも、メンバーが皆美しいから。また、男性が化粧をすること、その状態でロックを演奏することについて、「気持ち悪い」「アウトローである」といった感想は抱かずに、純粋に美しい存在感に惹かれたとのこと。これには、母がSHAZNA、THE YELLOW MONKEYのファンであったことに影響されたかもしれない、と言っていた。とにかく、彼女はそんなメンバーたちの容姿に惹かれ、それからその音楽を好きになっていった。音楽的には、歪ませたギターによるヘヴィーな「ウルサイ感じ」が好き。歌詞に関してはあまり気にすることはなく、「歌詞は心を打たれるものが好き。ヴィジュアル系バンドの歌詞にはあまり心を打たれない」と答える。また、ヴィジュアル系バンド以外では、外見も含めて「アート性」を感じる、例えばパフューム、きゃりーぱみゅぱみゅ、LADY GAGAなどが好き、とのことである。メンバーたちの容姿からその音楽を、それから、彼らが着用するような洋服が好きになり、彼女はファッションもヴィジュアル系的な、ゴシックも含めたいわゆる「KERA系」のものを好むようになる。

Bさんは、ヴィジュアル系バンドメンバーたちの見た目の美しさの「非現実性」に大い

に魅力を感じた。彼女にとって非現実性とは精神的な美しさも含めた「美の追求」であるという。それは元々の顔立ちの美しさもさることながら、化粧の技術によっても得られる人造美であり、その「非現実性」の領域に足を踏み入れたくなったようなのだ。また、同じく非現実性の当事者として「漫画的女の子のキャラクター」も好きだという。特に、非現実性の権化でもある「初音ミク」がとても好きで、その非現実存在を現実に召喚し楽しむ行為としてコスプレもする。彼女は、浅葱色がトレードマークの初音ミクらしさを演出するために、アイシャドーやネイルをグリーンに統一。さらに「精神もコスプレ仕様にする」。実際に初音ミクの衣装を着用し、カメラに向かってポーズを決めたBさんの写真を見せてもらった。彼女の元々の美しい顔立ちも相まって、よく似合っているが、そこにいるのはもはやBさんではなく「ミク」なのだった。

Bさんにとって、メイクは女性のためのものではなく、美しくなるためのものだという。彼女にとっての「女の人（男の人）はこうあるべき」という意識は持っている。しかし、その意識はファッションには当てはまるものではなく、ファッションは自由なのだ。また、彼女は「KERA系」という大きな枠の中にある細々としたジャンルの一つとしてゴシックファッションを愛している。ゴシック・ファッションに関して、彼女の心を掴むのは、現在の服の形からみて極めてアナクロな「非現実性」、そして二章でも述べたルールである。ゴシックは、その他サブカルチャー的ファッションと同様、ルールに則っていないとその魅力を発することはない。これは、彼女にとって、「武道と同様の“非現実的なるもの道”の探求」に等しい。彼女は人の手によって追求された、「美しく完成されたもの」を作るために努力するのが好きなのだ。

### 3-3 Cさんの場合――

Cさんは、「中途半端な田舎」と自称する登別市の実家を出て、3年前から札幌で生活するフリーター。待ち合わせ時刻は夕方17時、彼女の仕事が終わった後に会う約束を取り付けた。待ち合わせ場所に現れたCさんは、花柄のミニ丈ワンピースに茶色の合皮のジャケット、足元はタイツとショートブーツといった姿。いくら派手な格好が好きだとはいえ、生活がある分、仕事先では派手な姿でいられないためTPOを考えてカジュアルな格好しかできない。彼女は一見どこにでもいる普通のお嬢さんという格好だが、腰の位置まである長い黒髪の存在感がやけに際立っていて、彼女の精神の根底がゴシック者であることを主張しているようだった。

彼女の子供時代は、現在の女性らしい姿からは想像のつかないボーイッシュなもので、一緒に遊ぶのはもっぱら男の子か、もしくはお絵かきや塗り絵などの一人遊びで過ごしたとのこと。子供時代で、何か印象に残っていることを挙げてください、と質問したところ、「小学3年生の時、父が唐突に SHAZNA のCDをプレゼントしてくれたこと」と答えてくれた。SHAZNA は、中世的な容姿のボーカル IZAM の美しさが際立つ、97~98年頃にお茶の間で絶大な知名度を誇ったヴィジュアル系バンドである。当時テレビで彼らのパフォーマンスを観て「良いな」と反応したCさんのために、父が買ってきてくれたのだという。当時からヴィジュアル系的音楽や存在について、興味を抱いていた。

小学生のCさんは、男児向けアニメ（例えば「ゾイド」など）が大好きで、女の子向けの作品はちっとも肌に合わず、高学年になる頃には、「完全に男扱い」されていたという。服は、イトーヨーカドーなどの店で父が選んだり、自分で「これが欲しい」と選んだ男の子っぽいものを着用。友人はやはり男子が多く、女子の友達は2、3人。「遊戯王」などのカードゲームをしたりして過ごした。また彼女は身長は低めだったが、陸上をやっていたためがっちりとした体格で、そのためか、男子と腕相撲をしてもいつも勝っていたらしい。ところが中学生になると、男子の二次性徴が始まる時期であるため、自分より貧弱だと思っていた男子たちが逞しくなってくる。Cさんは、今まで腕相撲で勝ち続けてきた相手に負けてしまうようになり、大変悔しい思いをした。この頃のCさんは、メンズサイズのダボダボとした、いわゆる「B系」に近い格好を好んでいた。なぜダボダボに魅力を感じていたのかというと、「メンズの製品に見られる柄が好きだったのと、体が大きく、(B系ファッションに特有のちょっとした「怖さ」により)強くなった感じがするから」とのこと。彼女は小さい頃から、周囲の女子の女々しさに嫌気がさして、しばしば男になりたい、という思いを抱いていた。

このようにボーイッシュだったCさんが、女性らしいお洒落に目覚めたのは、中学2年生頃のこと。当時好きだった Gackt（現 GACKT）がきっかけであったという。当初は、Gacktと同じような格好がしたい、という羨望の目で見えていたが、徐々に、その年代の少女が考えるように「Gacktが気に入るような女性になりたい」と考えるようになった。そのGacktが公表していた好きな女性のタイプが「ボン・キュッ・ボンの外人タイプ（Cさん談）」。

こうして彼女は、女性らしいお洒落を求めるようになっていった。

Gacktが大好きだったCさんは、当時、Gacktに関する記事が掲載された音楽雑誌は全て入手していた。それは主にヴィジュアル系バンド専門のものが多く、それらには

『KERA!』『Gothic&Lolita Bible』の広告が掲載されていた。それらで初めてゴシック・ファッションの情報に触れたCさんは、すぐさま「これだ!」と「ピンときた」。この出会いは、まさに価値観が大転換を起こした瞬間であったのだそう。まず、ゴシックなメイクに惹かれてから、次に服へと興味を持ったのだという。まだ洋服に自由に使えるお金の少ない年頃だったうえに、地元にはこういったゴシックの服を作るブランドの店はなかったため、古着屋にあった「それっぽい」服をリメイクすることで用意した。自分でこれらの服を着ることに抵抗はなかったが、外出したところ、親に怒られてしまったという。

この頃から、中央で活動し全国的な知名度を誇るバンドだけでなく、ライブハウスで活動する地元のバンドのライブに行くようになり、音楽的にも、ファッション的にも「ボルテージが上がった」。まずCさんは、音楽ありきでファッションにはまった。ゴシックのような、ほとんど黒尽くめのコーディネートもすれば、パステルカラーのデコラ・スタイルも着る、など、観に行くバンドに合わせて「KERA系」ファッションをとっかえひっかえするようになった。高校2年生までそうしてバンドに熱中してきたが、この頃から、かつてGacktが参加していたMALICE MIZERの影響で、「お耽美系」に興味の対象が集約していった。これはMALICE MIZERをはじめとするようなヨーロッパ貴族的でゴシックな世界を表現するバンド群を示すヴィジュアル系バンドのジャンルの一つである。Cさんが「お耽美系」にはまった理由に、より作りこまれた世界観を味わえること、またライトなテイストのバンドよりも独特で濃いメイクを挙げている。彼女の好きなバンド、Versaillesを例に挙げると、ストーリーとして繋がった楽曲群や、「姫」「王子」などの役割を持ったメンバーが「家族構成的」で楽しいとのことだ。これら「お耽美系」は、楽曲や歌詞の内容にも特徴があり、自分を追い詰める、闇の国などといった暗い心象を歌詞にしたものが多い。例として、CさんはKAYAの「ショコラ」を挙げてくれた。この曲は、聴いてみるとまるで歌謡曲のような明るくポップな曲調だが、歌詞の内容は、誰からも必要とされなければ溶けてしまうチョコレートと女性の姿を重ねた、どこことなく哀愁の漂うものとなっている。Cさんは、「お耽美系」をはじめ、アンダーグラウンドやインダストリアル方面の暗い歌詞を、自分の経験（交際相手とのすれ違い、離婚、かつての自殺願望など）と照らし合わせながら聴くのだそう。

次にCさんのファッションについて。現在は、ゴシックイベントのある日には「過剰装飾」スタイルで、三善などの舞台用ファンデーションで白塗りにする、ボリュームのあるウィッグをつけるなどをして出かける。彼女がメイクに見出す面白さとして、客観的に自

分に向かい、自分をプロデュースできることを挙げてくれた。まずは「誰々になりたい」という思いを抱きながらメイクをして、挑戦の果てに目的の容姿に「なれた」という達成感が好きだった。さらに誰かの真似ではなく、自己流にアレンジするなどしてオリジナリティを追求する、ある意味自分の顔をキャンパスにして絵を描くのと同じ楽しみを得たという。で、メイクによりなりたい顔になったら今度は服をコーディネートし、髪型をセットしていく、という具合に、まず彼女の頭には「テーマ」があり、「テーマ」ありきでメイクを、やがて全身をプロデュースしていく。例えばテーマを一つ挙げるなら、「貴婦人なピエロ」というような。実際ならありえない存在ではあるが、「だからこそオリジナリティーが溢れていて、目立つから」。

そしてゴシックイベントに繰り出しては楽しむのだそう。イベントでは、誰と話すわけでもなく、その場にいるのが楽しくて、場所からエネルギーをもらえる。その場所で人間観察するのも面白いとのこと。どうやらCさんをはじめイベントに出没するゴシック者たちが行っているのは、絵を描くなどの創作行為のように自己に手を加え、そしてそれを発表するメディア活動のようにも思える。Cさんは人と違ったものが好きでゴシックにのめりこんでいった。そのため、いかに人と違う、素敵な存在になれるかを考え、それぞれ武道のように「極めていくもの」と捉えているようだ。彼女が理想とするゴシックなあり方は、「“ゴシック”を超えたゴシック」だという。なぜなら現在雑誌や書籍等で提唱される「ゴシック」は制服化しており、自己流やオリジナリティーを目指しておらず、ゴシックの括りが狭められていると。Cさんにとってゴシックは自由の場所であり、普通の服を着て過ごすだけでは到底ありえない試みを、自分の身体でもって表現できるのが魅力であり、そうして極めていくことにエクスタシーを感じる、とのこと。そして、イベントに出没する、自分も含めた彼らのことを「共同体」と表現する。「ゴシックが好き」ということで、多かれ少なかれ好きなキーワードが似てくる。制服化された「ゴシック」に冷ややかなのも共通しているという。しかし、Cさんは彼らとの関係を、「一歩二歩下がって、壁を作ってから接する。本格的に仲良くなるのは、心が開けるようになってから」と説明する。Cさんをはじめ、イベントにおいてのゴシック者は、ハンドルネームのような「ゴシックである時のニックネーム」を持っている。その名前とメイクが仮面のような作用をしていて、少し仲良くなった相手からは、「この人はこういう人でなければ」という認識をされやすいのだそう。だからこそ「私」が出ると、相手は離れていくかもしれないということで、ある程度のプレッシャーを感じるという。「よく、“ゴシックファッション”をしている私が

本当の私”という人がいるけれども、私の場合はそれは当てはまらない。

そんな彼女は、現在はゴシック者が集うイベントを主催する活動をしている。どうやら、彼女が「お世話になった」と話すゴシック者の「先輩」がいて、ゴシック者が好む趣向を凝らしたバーを運営し、イベントも多数主催してきたが、病気で店を閉めてしまったらしい。「だから、今度は私がゴシックのために活動して、楽しい魅力的な世界を次の人に伝えていきたい」。

### 考察とまとめ

サブカルチャー、そしてサブカルチャー由来のファッション・スタイルは、その特殊な制服的「ルール」の存在によって、それを愛する個々人の生の姿が覆い隠されがちである。それゆえに、その当事者たちの意思に反したところで、マスコミなどによって取り上げられた、ステレオタイプの「〇〇の愛好者像」が広められていってしまうのが現実である。そして、ゴシックにおいても、市場をほぼ独占している大手雑誌類の記事や「読者のお便りコーナー」を覗くだけでは、個々人の姿は曖昧でわからない。それどころか、記事に登場する「カリスマ」的存在が提唱する「理想のゴスロリちゃん像」によって、読者その人が本来の人間性を違った方向へ曲げてしまうことが考えられる。いわば、制服的ルールを良しとするサブカルチャー・ファッションの性質により、逆にサブカルチャー・ファッションの世界や愛好者の個性の幅が狭められてしまう可能性があると考えた。

しかし、インタビューを続けていくうちに、彼女たちの鮮やかな個性を見て驚かされた。それぞれの性格や人間性も、当たり前ながらばらばらであるし、それを知ることになったきっかけや、それぞれの「嵌り具合」、楽しみ方の方向性も違う。Aさんはかっちりした洋服を好む子供だったが、小学校の「場」にそぐわずに悩んだ過去を持つ。しかし、全体的にアナクロで、数あるファッションジャンルの中でも異彩を放つゴシック&ロリータファッションに出会い、再び自分の好きなお洒落がしたいと前向きになれた。彼女にとって、ゴシック・スタイルは現代のファッションのメインストリームからあぶれた自身の感性を救う役割があつたのだ。かと思えば、Bさんはあらかじめ特殊なものとして存在する「非現実性」がお気に入りだし、Cさんはゴシックイベントで見えない仮面を被りつつも、オリジナルな「作品」として存在感を発揮する。

このように、異なる人々が異なる理由や過程でもって自身の着る服を選んでいるわけだ



が、その異なった感性が一つのジャンルを選択し、ゴシック・スタイルという現象を作り上げているのである。小野原（2011）は、ゴシック&ロリータを愛好する少女たちは、「ほんとうの自分」になるためにそれらの洋服を着用したがる」と記述しているが、上記のCさんのケースはこれに反するため、必ずしもそれは当てはまらないといえる。それゆえに、個人レベルの行動と選択によって社会的なファッションを説明することは不可能であるとわかった。これは、その他の現在もてはやされているサブカルチャー的スタイルにおいても言えるかもしれない。

しいてゴシック・スタイルの愛好者に共通する箇所を挙げるとするならば、個人差はあるものの、彼女たちに多かれ少なかれ、社会と自身の付き合いにおいて独特な「挫折」経験をもっていることだろうか。高原（2004）は、「ゴシックな意識」について「“ゴシック”という名の感受性であり、好悪の体系」としている。これは、「進歩主義を強く敵視し、勢い、大抵の流行にも懐疑の視線を向け、そして、飽くまでも孤立したまま偏奇な個であろうしたがるもの」と高原は定義する。彼女たちはその「挫折」により、服装における他者との同調よりも自己の嗜好を優先し、「普通」を斜に構えて、冷ややかな目で見つめる、高原の著書から言葉を借りるのなら、「ゴシックハート」が育ったのではないかと考えた。高原の著書には、ファッションと「ゴシックハート」の関連については詳細には記述されておらず、今後の研究課題であろう。しかし、間違いなくゴシックファッションは「ゴシックハート」によって構成され、作り上げられ、求められてきたのだ。

また英国では明確な階層があり、サブカルチャーのは文字通りその「サブ（下位）」の若者から発生した。階層のない日本においては、「スクールカースト」という言葉があるように、人間性・精神性に付随する諸々によって自ずと見えない「階層」が出来上がるのではないか。そして、「ゴシックハート」を抱いてしまったゴシック者は、おのずと見えない「階層」の下位に位置づけられてしまうように思えた。（事実、アメリカの高校において、ゴシックな趣味を持つ者は「Nerd(スポーツ以外の趣味に打ち込むパツとしない者)」、「Looser(はみだし者)」としての扱いを受ける）。

今後の課題について、本研究におけるインフォーマントが札幌周辺の20代前半の女性、しかも3人だけに留まったため、より公正で幅広い調査結果を求めるためにより多くの聴き取り調査が必要だと感じた。また、高原の「ゴシックハート」論を発展させ、いかにして「ゴシックハート」がファッションへ働きかけるかを明らかにすることが必要である。

## 参考文献・資料

- 遠藤 徹「怪物学原論への助走：マイケル／パンク／怪獣」『言語文化』3・1：1-16 p、(2000)
- 小野原教子『闘う衣服』水声社 (2011)
- 高原英理『ゴシックハート』講談社 (2004)
- 中野香織『モードとエロスと資本主義』集英社新書 (2010)
- 樋口ヒロユキ『死想の血統 ゴシック・ロリータの系譜学』幻冬舎 (2007)
- 渡辺明日香『ストリートファッション論 日本のファッションの将来を考える』産業能率  
大学出版部 (2011)
- D・ヘブディジ著、山口淑子訳『サブカルチャー スタイルの意味するもの』未来社 (1986)
- M・J・ホーン、L・M・ガレル著、藤原康晴、杉村省吾、池本明訳『被服心理学序説 フ  
ァッションと個性』昭和堂 (1983)
- サイモン・レイノルズ著、野中モモ、新井崇嗣訳『ポストパンク・ジェネレーション  
1978-1984』シンコーミュージック・エンタテイメント (2010)
- 『Gothic&Lolita Bible Boudoir』インデックス・コミュニケーションズ(2008)
- 『Gothic&Lolita Bible vol.32』インデックス・コミュニケーションズ(2009)
- 『Gothic&Lolita Bible vol.39』インデックス・コミュニケーションズ(2011)
- 『Gothic&Lolita Bible vol.42』インデックス・コミュニケーションズ(2011)
- 『Gothic&Lolita Bible vol.43』インデックス・コミュニケーションズ(2012)
- 「ジョック・Wikipedia」
- <http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%B8%E3%83%A7%E3%83%83%E3%82%AF&oldid=34052541> (アクセス日時 2012年12月10日)